

社会福祉実践等における「共生」概念の批判的考察

－「共生」の根源的意味から－

○ 社会福祉法人白石陽光園 共生型グループホームながさか 笠松 剛士 (会員番号 008819)

田中 治和 (東北福祉大学・会員番号 000116)

キーワード：共生 社会福祉専門職 人間観

1. 研究目的

本研究の目的は、社会福祉実践等における「共生」概念の批判的考察である。現代では「共生」や「共に生きる」などの言葉が散見しているが、裏を返せば、「共生」できていないことを自明しているのではなかろうか。その「共生」できていない人間がどのようにこの「共生」を捉えているかの問いである。尾畑は「共生」について次のように苦言する『共生』という理念だけが中空に飛び出て、『共生』が内実化されないまま、『共生』の時代だと幻想的に語られているのではないか。本当は誰もが、『共生』など眼中にないし、意識にもあがらないのではないか。それにも関わらず、『共生』の理念が無視できないのは、それを考えたり、それをいったりすることによって、『共生』することのない自分、自分たちの「健全者」社会を正当化するためではないか(尾畑, 1998, p.149)と。ある意味「共生」という耳触りのよい言葉を使っているだけで、使っている側のただのおごりではないか。社会福祉従事者及び教育研究者が、「共生」という言葉を用いる時に、自分自身はその中に入っているのだろうか。その可否は、社会福祉の対象者、いわゆる利用者をどのような眼差しで捉えているかに大きく影響を与えるのではなかろうか。

本研究では、この「共生」という言葉の批判的考察を試みることで、これまでの、そして現在の社会福祉実践及び社会福祉学の根底を問うことにも繋がると考えている。

2. 研究の視点および方法

現代の社会福祉で使われている「共生」という根源に富山型ケア(共生ケア)がある。なぜそれが可能になったのかという根拠として、私は浄土系の仏教が深く関係しているという仮説を立てる。そこで「共生」を法然や親鸞、並びにそれらに関する文献を使って辿っていき、「共生」という言葉のより根源的な意味を捉え考察していく。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に従い、引用・参考文献等を明記するなどの倫理的配慮を行った。

4. 研究結果

共生ということばをはじめに世に知らしめた一人が椎尾弁匡である。椎尾は浄土宗であり、共生を「ともいき」と呼んだ。この語源を椎尾は善導大師『往生礼賛』の「願共諸衆生、

往生安楽国」(願わくは諸の衆生と共に安楽国に往生せむ) からきているとされている¹⁾。

共生ケアの発祥の地富山県は周知のとおり真宗王国と言われており、共生ケアの代表として惣万佳代子も富山県出身である。この宗教的雰囲気も、「共生」ケアの間接的要因と言えよう。善導の流れを汲む法然及び親鸞の著作には、自らをも含む徹底した厳しい人間への凝視があり、そして人間の平等、つまり共生を説いたのである。その人間観とは、人間は凡夫であり、煩惱に縛られ、業縁的存在²⁾であり、「さるべき業縁のもよほせば、いかなるふるまひもすべし」(歎異抄・十三)という理解である。そして新井も親鸞の唯信鈔文意を引用し「「いし・かはら・つぶて」というのは、全く善根のない「われら」凡夫であるが、考えてみれば商人、獵師でなくても、最高の僧侶や天皇・貴族に至るまで、誰でも生きている限り煩惱を離れられない。この意味で、人間はその原点ではすべてが凡夫である。親鸞にとっては、自我が破られ無我の境地に達するとは、如来の本願に照らされて、凡夫としての自己の本来の姿に目覚めるということである。この目覚めが他者との共生の原点」(新井, 1999, p.152)としている。

さらに「共生」という世界を目指すには、より厳しい自省する姿勢が問われてくる。例えば法然は亡くなる直前に『一枚起請文』において「一文不知の愚鈍の身になして」と書き、親鸞もその言葉を踏まえて、約半世紀後に「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」(末燈鈔 第六通)で著わす。自らを〈愚か〉とするところから、「共生」への道が拓かれるのではなかろうか。

5. 考察

現代の社会福祉は、いわゆる対象者(利用者)の世界に身を投じてなく、実践を行っていないように思う。社会福祉は人間の禍や不安の軽減に尽力することであるが、裏を返せば人間の禍や不安で生計を立てているという冷徹な事実も看過できない。〈愚か〉な自分自身を深く問う、問い続ける姿勢があつてこそ、初めて社会福祉実践において重要な平等観や人間観が養われていくのではないか。そして「共生」という道の出発点に立脚できるのではなかろうか。

謝辞

本研究は、東北福祉大学感性福祉研究所感性福祉研究センターが実施している、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業におけるG1-2チーム『「災害」が社会福祉、ソーシャルワークに与えた衝撃とそれへの対応に関する研究』の研究成果の一部である。

注

1) 大南龍昇(1999)「椎尾弁匡師と共生浄土」『仏教における共生思想』平楽寺 p.35 参照

2) 阿満利磨(2003)「社会をつくる仏教」人文書院 p.219 参照

引用文献

尾畑文正(1998)「共生の仏教学」『季刊、仏教、特集〈共生の思想〉』法蔵館

新井俊一(1999)「親鸞における共生の思想」『仏教における共生の思想』平楽寺